台湾・日本の女子大生の接触場面における初対面会話の一考察		
張　瑜珊		国際日本学専攻
期間	2006 年 9 月 10 日～2006 年 9 月 25 日	
場所	台湾　台北市	
施設	東呉大学、 師範大学中国語学習センター、 国家図書館	

内容報告

1. 海外調査研究の目的

筆者（台湾出身）は日本に留学し、日本人との初対面会話の度に、相手方の多くが筆者にあまり興味を持たないと感じた。つまり、台湾人同士間の初対面会話と比べ、日本人との場合は心理的な距離感が遠く、親しみを感じにくかったのである。なぜこのような現象が起きたのだろうか。これに関して、筆者は文化的相違に関係する現象ではないかと考えた。つまり、台湾人と日本人は文化圏が異なり、それぞれ異質な初対面行動のルールを持っているため、両者が接触すると、互いに相手方の言語行動に違和感を覚えるのではないだろうか。

その理由を探求するために、修士論文では台湾と日本それぞれの母語場面における初対面会話行動について、実際の会話データから対照研究を行った。その際、話題選択を分析の観点として使用し、台湾・日本の 10 ペアずつの 20 分会話をすべて話題という分析単位に分節し、次の五種類のカテゴリーに分類した。即ち、①セッティング話題、②百科事典的話題、③自己に関する話題、④相手に関する話題、⑤第三者に関する話題、以上である。こうして日台母語場面の差異を調査した。分析の結果、全体の話題選択傾向に関して日台間の大きな違いは見られなかったが、時間を五分ごとに細分化し、再度カテゴリー分析を行なった結果、会話開始 15 分後になると、台湾グループは第三者に関するトピックを取り上げることが増える一方で、日本グループは自分のことを語る傾向が依然として強かった。つまり、日本人には相手あるいは第三者のトピックを扱うより、自分のことを開示するという言語行動が見られた。従って、台湾人日本語学習者が日本人と初めて接したときに、日本人側から自分たちのことを話題として取り上げられないため、物足りなく感じている可能性が考えられる。（張、2006）

さらに、同じデータから台湾人と日本人は話題を展開するとき、相手のどんな身上的情報を必要としているかについて会話開始から 5 分間内を調査した。その結果、台湾人同士は会話の相手の出身地、住まいに関するカテゴリーが日本より多く観察された。台湾人はより私的な個人的情報を開示している傾向があるといえよう（張、印刷中）。

しかし、以上の両研究は台湾と日本それぞれの母語による初対面会話の場面から分析したものである。つまり、台湾人と日本人との接触場面への解釈は推測の範囲を出ない。それ故、今後は台湾人と日本人との接触場面の初対面会話の収集と分析が必須である。

その場合、中国語を共通語とする場合と日本語を共通語とする場合の 2 パターンが考えられるが、日本では中国語を使用した日台接触場面がさほど多くないことに較べ、日本人留学生や日本人駐在員の比率が高い台湾では中国語による日台接触場面が定着しつつある。さらに、大学における台湾人日本語学習者と日本人留学生の交流では、日本語の使用傾向が強い。そのため、台湾国内における日台接触場面は、中国語・日本語の両パターンがいずれも日本以上に頻繁に存在し、データ収集上でのメリットが極めて大きいと言える。

2. 海外調査概要

2-1. 会話データの収集に関して

2-1-1. 協力者

台湾人と日本人の女子大生の協力者の募集は、東呉大学と台北でも日本人の中国語学習者が最も多い師範大学中国語学習センターで行った。東呉大学では、日本語学科に所属する台湾人の学部生・大学院生のうち、日中両言語で日常会話ができる学生を紹介してもらい、師範大学中国語学習センターでは、日本人の中国語学習者の紹介を受けた。

こうして台湾人母語話者 10 名と日本人母語話者 10 名、計 20 名の協力を得た。初対面同士となるように配

慮してペアを組み、さらに、どの協力者からも中国語と日本語の両言語による初対面会話データが収集できるように、台湾人 2 名と日本人 2 名で以下表 1 のように組み合わせ、合計中国語場面 10 組、日本語場面 10 組のデータを集めた。組み合わせる方法は表 1 で示すように、グループ 1 の台湾人 A、B と日本人 A、B の 4 つの会話データを収録した後、グループ 2 の台湾人 C、D と日本人 C、D を収録した。以下同様である。

最初の接触場面で使用する言語が、2 回目の使用言語に影響を与えないように、各グループの開始言語をコントロールした（下線を引いた部分を参照されたい）。つまり、グループごとに最初が中国語場面なら、次のグループは日本語場面から始まる。

この操作によって、10 人の台湾人協力者は半分が中国語から、残り半分が日本語から、いずれも両言語による初対面場面を経験した。日本人も同様である。

＜表１　データ収集における４人ペアの中国語と日本語による初対面会話の組み合わせ＞

グループ 1 の会話セッション：
a-1 台湾人A対日本人A・・・・中国語場面
a-2 台湾人 A 対日本人 B・・・・日本語場面
a-3 台湾人 B 対日本人 B・・・・中国語場面
a-4 台湾人 B 対日本人 A・・・・日本語場面

会話終了後のアンケートセッション：
b-1 台湾人 A と日本人 A：アンケート（1）
b-2 台湾人 A：アンケート（2）＋日本語自己評価シート
　　日本人 B：アンケート（1）
b-3 台湾人 B：アンケート（1）
　　日本人 B：アンケート（2）＋中国語自己評価シート
b-4 台湾人 B と日本人 A：アンケート（2）＋それらの L2 の自己評価シート

⇒

グループ 2 の会話セッション：
a-1 台湾人C対日本人C・・・・日本語場面
a-2 台湾人 C 対日本人 D・・・・中国語場面
a-3 台湾人 D 対日本人 D・・・・日本語場面
a-4 台湾人 D 対日本人 C・・・・中国語場面

会話終了後のアンケートセッション：
b-1 台湾人 C と日本人 C：アンケート（1）
b-2 台湾人 C：アンケート（2）＋日本語自己評価シート
　　日本人 D：アンケート（1）
b-3 台湾人 D：アンケート（1）
　　日本人 D：アンケート（2）＋中国語自己評価シート
b-4 台湾人 D と日本人 C：アンケート（2）＋それらの L2 の自己評価シート

2-1-2. データ収集の方法

各グループのデータ収集に関する手順は次の通りである。まず、表 1 のグループ 1 の a の会話セッションを実施し、b のアンケートセッションに移る。その後、グループ 2 の a の会話セッションが続き、b のアンケートセッションが行なわれる。

以下、会話データとアンケートデータ、二つのセッション内容について詳説する。

1)会話データ：

協力者に「自由に話してください」という指示を出し、20 分の会話をしてもらった。会話データは IC レコーダで録音し、非言語要素はビデオカメラに収めた。

2)アンケートデータ：

アンケートは次の 3 種類である。

（1）一回目の初対面会話後の会話調査アンケート、
（2）二回目の初対面会話の会話調査アンケート、
（3）中日両言語能力に関する自己評価チェックリスト、

である。いずれも協力者の母語別に中国語バージョンと日本語バージョンを用意し、使用した。尚、（1）と（2）のアンケートは記入項目が多少に異なる。

2-2. 文献収集に関して

博士論文では、実際の会話データを対象とし、台湾と日本の女子大生がどのように会話で人間関係を作るかを比較検討したい。そのため、①中国語の談話分析に関する研究、②台湾人あるいは中国人の人間関係形成に関する研究、③台湾の文化に関する理論、などの資料が必要となる。そのため、台湾の国家図書館で資料収集を行なった。ここでは、台湾で刊行されたジャーナルはもちろん、台湾全土の博士・修士論文も閲覧・コピーできる。さらに、各種ジャーナルのダウンロードも可能であるが、館外では不可能である。

3. 本海外調査の結果

3-1. 会話データに関する一考察（中国語場面と日本語場面の一場面ずつの比較）

台湾人協力者 T1 をベースデータとして、T1 が中国語による初対面会話（と J1）と日本語による初対面会話（と J2）のすべての会話を文字おこしした。その二つの会話データを、5 分間内の身上的情報のカテゴリーを比べ、さらに、20 分間の話題選択傾向についても比較をする。最後に T1 が両言語場面を経験した感想についてのアンケート内容を振り返る。

3-1-1. 分析 1（5 分間の身上的情報について）

張(印刷中)の分析の枠組みを援用して、二つの会話

を対象に、冒頭5分間の分析を試みた。両データに現れた身上的情報のカテゴリーは以下表2の通りである。

＜表2　5分間の会話において中国語場面と日本語場面の身上的情報の違い＞

言語場面	協力者	名前	学科	学年	学校	専攻	出身	言語
中国語	T1	○*（自）	○*（自）	○*（自）			○*（自）	
	J1	○*（自）		○*（自）	○*（自）	○*（自）	○*（自）	
日本語	T1	○*（自）		○（質）			○（自）	○（質）
	J2	○*（自）	○（質）					

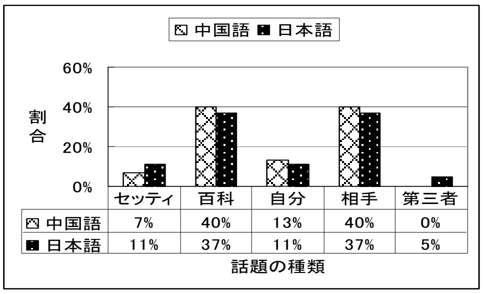
*とは自己紹介と見す一まとまりの中から抽出したもの。
(自)とは、自ら情報を提供するのを意味する。
(質)とは、相手の質問に引き出されること。

以上の結果から、中国語場面の初対面会話では、すべての身上的情報が「自己紹介」と見なすことができるひとまとまりの部分から現れることが分かった。一方、日本語場面の「自己紹介」では氏名の交換のみであった。他の情報は、会話の展開につれて自ら提供するか、相手の質問によって引き出されるかであった。

3-1-2. 分析2（話題内容について）

分析2では、20分の会話のすべてを五つの話題のカテゴリー（張2006）に分類し、その相違を比べた。その結果、中国語場面と日本語場面の話題選択傾向について次のようなことがわかった（図1参照）。

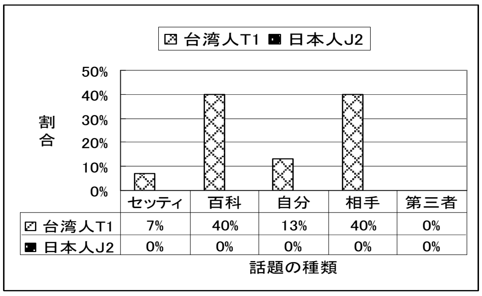
まず、それぞれの言語場面の話題選択傾向だが、5つの話題が選択される割合にはあまり差がなかった。具体的には、百科事典的な話題と相手に関する話題が選択される割合が一番高く、次いで自分・セッティング話題が続き、一番少ないのは第三者に関する話題である。



＜図1接触場面の話題選択傾向（言語場面別）＞

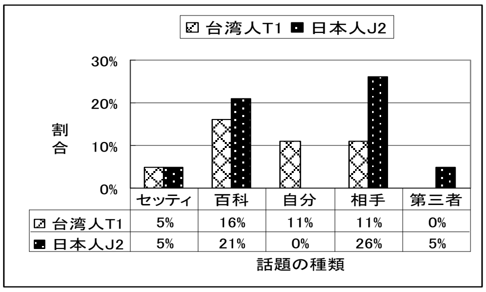
そこで、それぞれの言語場面で、誰がどの話題を選択したかを図2と図3で示す。

図2から分かるように、殆どの話題転換は台湾人T1によるものである。それらの話題選択傾向は、先述した言語場面別の結果と同じである。中国語場面での話題転換で日本人が何も受け身的であったことに関しては、言語能力の差によって言語ゲストの役割を演じ続けたのではないかと考えられる。



＜図2　中国語場面の話題選択傾向（話題転換者別）＞

図3は日本語場面における話題選択傾向で、台湾人と日本人の相違を表したものである。日本人J2は自分に関する話題を自ら言い出さない傾向があるが、逆に、台湾人 T1 は相手の日本人に質問しながらも、自分に関する話題を提供する傾向が見られる。



＜図3　日本語場面の話題選択傾向（話題転換者別）＞

3-1-3. 分析3（会話終了後のアンケートについて）

T1は第一回目の接触場面が中国語で、二回目は日本語である。中国語と日本語の異なる場面における初対面会話に関するT1の感想は以下の通りである。

① 「自分のことについてどこまで話したか？」…日本語の方があまり話せなかった。
② 中国語による会話はインターアクションがよりしやすくお互いの話が充分にできた。
③ 一方、日本語による会話では自分の言語能力に限

界があり、伝えたいことが思うように伝えられなかった。そのため、会話が深まらなかった。

④　中国語会話は、気楽で話題も多かったが、日本語の方は緊張した。

以上の事例を踏まえ、なぜ使用言語が変わると、台湾人 T1 の言語行動が変わるのか、そして、それぞれの言語場面で日本人との距離感に違いがあるのかについて、残り 9 ペアの会話データとアンケートを統合的に考察する必要がある。そのため，全会話データの全部の文字化が急務である。

3-2. 文献調査の結果

台湾人或は中国人の人間関係に関する研究は、主に社会心理学の文献が多く、中国人の関係性形成の仕方、自己人（内の範囲の人）と外人（外に属する人）の区別などに関して、中国の伝統文化から解釈もしくは何らかの尺度で調査したもの等が見られた。日本ではこの領域で中国人あるいは台湾人を対象にする研究が少ないので、多くの収穫が得られたと言えよう。

しかし、談話を研究対象とする分析によって人間関係の形成や文化差を指摘したものや接触場面に関する研究は台湾でも見当たらなかった。

4. 博士論文における本海外調査研究の位置づけ

博士論文では、主に初対面会話を四つの会話場面から究明したいと思っている。一つ目は台湾人同士による中国語の初対面会話である。そして、二つ目は日本人同士による日本語の初対面会話である。この二つの場面から、台湾人と日本人はそれらの文化グループではどのような言語行動で初対面会話を経験し、関係性を構築していくのかを明らかにする基礎研究である。これらは既に修士論文で手がけている。

そして、この二つの場面から得られた知見を、次は接触場面で検証する。日台各母語話者が、母語場面で使用するコミュニケーション方法を、接触場面でも使用するのか、あるいは、接触した両文化の文化成員がそれぞれの既有の言語行動を譲り合って、第三の接触の仕方を構築していくのかについて研究を進めていきたい。

従来の接触場面研究は、外国人留学生が日本語を使用する場面のみ扱うものであったが、使用言語によって自己の振る舞いが変わる可能性も考えられる。さらに、言語ゲストと言語ホストという役割による影響もあると言われる。そのため、留学生の母語で日本人と接触する場合の実態も調査・分析しなければならない。本海外調査で収集した台湾人と日本人による中国語の接触場面と、日本語による接触場面のデータは、それに当たるものである。

5. 今後の研究・投稿計画

現在、収集した会話データの文字化を行なっている。まず、日本語による接触場面のデータを取り上げ、修士論文で明らかにした日本語と中国語の母語場面の初対面会話データと比較して、台湾人と日本人が接触場面で生じた現象を母語場面のフレームから解釈する。完成した論文は『世界の日本語教育』に投稿する予定である。

そして、中国語による接触場面を分析した研究は、得られた知見を中国語教育に還元すべく、『中国語教育』に投稿を予定している。

6. おわりに

本海外調査により、博士論文で必要とするデータ収集が可能となった。一日も早く台湾人と日本人の接触場面のダイナミズムを解明し、台湾の日本語教育及び日本の中国語教育の双方に示唆を与えられれば幸いである。

最後に、筆者のような留学生にもこの素晴らしいプロジェクトへの参加を許可して下さった大学に深く感謝を申し上げたい。今後、最大限の努力を払い、本海外調査から得られたデータを分析・研究して、一日も早く社会に還元したい。

参考文献

張瑜珊 (2006)「台湾と日本の女子大生同士における初対面会話の対照分析－話題選択について」『言語文化と日本語教育』第 31 号　第 31 回お茶の水女子大学日本言語文化学研究会発表要旨 p110－113

張瑜珊 (印刷中)「台日女子大生による初対面会話の対照分析－初対面会話フレームの提案を目指して－」『人間文化論叢』第 9 号

ちょう　ゆさん／お茶の水女子大学大学院　国際日本学専攻
yusan52@gmail.com

【指導教員のコメント】

筆者の張瑜珊は台湾からの留学生である。来日当初、日本人院生との初対面会話で違和感をもち、日本での留学生活に強い不安を持ったという。このような個人的体験から、張瑜珊は、日本人と台湾人それぞれが暗黙の前提としている初対面会話という言語行動には違いがあること、そして、台湾人留学生が日本語を使用していながら自らの母語の初対面会話の特徴を相手に期待するがゆえにそれが見つからず違和感や失望感を持つのではないかと考えて、研究を始めた。修士論文では、両国の女子大生を対象として、それぞれの母語場面における初対面会話の音声データを収集し、両者の特徴をフレーム分析により明らかにした。例えば、日本人女子大生同士の初対面会話は、まず「挨拶」などの定型表現で始められ、次いで、自分自身の身上的情報を述べることで相手にもそうした情報提供を暗に求めるというやりとりで会話が推移していくという特徴が指摘された。他方、台湾人女子大生同士の中国語による初対面会話は、定型表現の使用は全く見られず、直ちに相手に、矢継ぎ早に質問することで、相手から身上的情報を獲得することで会話が展開されるという特徴があることが分かった。このような修士論文の結果を踏まえ、次に、中国語と日本語の二言語併用者を対象として、使用言語の違いによって、初対面会話への参加の仕方がどのような影響を受けるのかを探ることを課題として設定した。そのために、中国語と日本語のレベルがほぼ同等の二言語併用者を得やすい台湾で初対面会話のデータ収集を行った。その一部が分析され、本稿に紹介されている。グローバル化の進行に伴い、多様な言語文化背景を持つ人々が日常的に出会う場が増えている。こうした中で、張瑜珊の研究は初対面会話に限られているとはいえ、母文化の下で培われた前提と、それが接触場面にどのように持ち込まれるかを明らかにしようとするものであり、意義のある研究である。

（文教育学部　教授　岡崎　眸）